

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅢ(助教研究支援) 2022年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部	跡部 千慧
研究課題名	ジェンダー・セクシュアリティ視点からの「労働-生活」の再構成 —性感染症 HIV 陽性ゲイ男性を事例として	
研究期間	2022年度	
研究経費	200千円	

【研究の概要】

本研究の目的は、性感染 HIV 陽性者であるゲイ男性の「労働と生活」を捉えることによって、「労働と生活」を射程に入れたジェンダー研究を発展させることにある。薬害エイズ患者が「良い患者」として日本の公衆衛生や福祉の対象となってきた一方、本研究で焦点化する性感染症 HIV 陽性のゲイ男性は、性感染症であること、同性愛者であること、働きにくいことなどの理由によって、重層的なスティグマを受け、公衆衛生から排除されてきた歴史があり、日本社会ではほとんど不可視化された存在である（河口・風間 2010; 大島 2019）といえる。

日本の性感染症 HIV 陽性ゲイ男性に注目することは、ジェンダー研究にとって非常に重要である。日本のジェンダーギャップ指数は 146 ヶ国中 116 位であり、先進国において、ジェンダー不平等が生み出されるメカニズムを解明する上で日本社会を焦点化することは欠かせない。さらに、日本の性感染症 HIV 陽性のゲイ男性を焦点化することは、日本社会の男性稼ぎ主と異性愛者を前提としたケア規範を生み出すジェンダー構造やメカニズムを分析することにつながる。だが、日本社会を対象としたジェンダー研究において、いわゆるセクシュアル・マイノリティの研究は少なく、性感染症 HIV 陽性のゲイ男性を取り上げた研究はさらに少ない。

日本における「労働と生活」研究は、労働領域と家族領域を行き来しなければならない既婚女性労働者を対象に切り拓かれてきた（木本編 2018）。これらの先行研究に学びながら、HIV 陽性ゲイ男性の実態をとらえ、「労働と生活」概念を拡張することが本研究の目的である。

【研究の成果】(今後発表予定のものを含む)

1995年に創刊されたゲイ雑誌『G-men』の分析によって、HIV 陽性ゲイ男性の「労働と生活」の実態を掘り下げた。雑誌分析の際には、ただ単に、雑誌を現実として捉えるのではなく、当事者たちが、いかに当事者の実態に即した「労働と生活」をどのように提示し、ゲイ男性たちに HIV/エイズを啓発しているのかを捉えていくことを心掛けた。

さらに、杉浦郁子・前川直哉（2022）による東北 6 県の性的マイノリティ団体活動調査の研究成果を踏まえて、『G-men』という雑誌メディアを通じた活動と、同性愛男性による活動を性的マイノリティ研究にどう位置づけていくかを検討した。

これらの研究成果を、2023年6月の国際学会で発表し、論文を投稿する予定である。今後は、『Badi』との記事分析の比較や、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえて、情報センター&フリースペースといった地域拠点へのフィールドワークや、地域拠点にいる精神保健福祉士といった専門職へのインタビュー調査も加えていく。

